

# てきすとぽい杯



『さあ、旅立とう』みお

『猫と熊と宇宙とそれ以外』茶屋

『落日』碧

『僕の彼女はマトリョーシカ』晴海まどか

# 目次

---

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第15回 募集要項

第15回 審査結果

入賞作品紹介

## 《大賞》

『さあ、旅立とう』 みお 獲得☆ 4.182

## 《入賞》

〈マトリョーシカ文学賞〉

『猫と熊と宇宙とそれ以外』 茶屋 獲得☆ 4.100

『落日』 碧 獲得☆ 4.100

『僕の彼女はマトリョーシカ』 晴海まどか 獲得☆ 3.909

〈候補作品〉 ※得票順

『なるはや！』 永坂暖日 獲得☆ 3.900

『けむたくない』 めぐる 獲得☆ 3.700

〈万物は桜色賞〉

『わたしの生きる道』 小伏史央 獲得☆ 3.667

『「なるはやで桜色に塗ってください」』 碓氷穰（元うわああ（ry）） 獲得☆ 3.600

〈狙いすぎで賞〉

『ぽい投稿一周年記念 帰って来たピー』 しゃん@にゃん革 獲得☆ 3.500

『最後の人間』 犬子蓮木 獲得☆ 3.400

『桜色の未来』 志菜 獲得☆ 3.400

『なるはや連辞一層次』 ひやとい 獲得☆ 3.000

終わりに

終わりに

てきすとぼい広告

奥付



「てきすとぼい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぼいは、2012年2月より制作・運営中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

2013年初頭に、ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、同年1月より てきすとぼい主催の競作イベント「てきすとぼい杯」を開始いたしました。



「てきすとぼい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぼい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

### 第15回てきすとぼい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/54/>

お題 : 三題 「桜色」「なるはや」「マトリョーシカ」

これらの言葉を、タイトルまたは本文で使用してください。

投稿期間 : 2014年3月8日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2014年3月9日 0:00 ~ 2014年3月16日 24:00

投稿期間中のTwitterまとめ : <http://togetter.com/li/639567>

第 15 回は、てきすとぼい杯初参加の作家さんお一人を含む、計 12 作品をお寄せいただきました。

### 【投稿について】

投稿期間：

3月8日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時刻になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/54/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

### 【審査について】

審査期間：

3月9日（日）0時 ～ 3月16日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

## 第 15 回審査結果

---

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1 位 ☆ 4.182

『さあ、旅立とう』 みお

<http://text-poi.net/vote/54/7/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:36

総文字数 : 4180 字

2 位 ☆ 4.100

『猫と熊と宇宙とそれ以外』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/54/5/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:29 最終更新: 2014.03.08 23:38

総文字数 : 2297 字

2 位 ☆ 4.100

『落日』 碧

<http://text-poi.net/vote/54/10/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:42

総文字数 : 1760 字

4 位 ☆ 3.909

『僕の彼女はマトリョーシカ』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/54/6/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:34 最終更新: 2014.03.08 23:44

総文字数 : 4025 字

5 位 ☆ 3.900

『なるはや!』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/54/12/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:44

総文字数 : 1250 字

6 位 ☆ 3.700

『けむたくない』 めぐる

<http://text-poi.net/vote/54/8/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:38

総文字数：1008 字

7位 ☆ 3.667

『わたしの生きる道』 小伏史央

<http://text-poi.net/vote/54/3/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:24

総文字数：1589 字

8位 ☆ 3.600

『「なるはやで桜色に塗ってください」』 碓氷穰（元うわああ（ry））

<http://text-poi.net/vote/54/2/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:24 最終更新: 2014.03.08 23:26

総文字数：1734 字

9位 ☆ 3.500

『ぽい投稿一周年記念 帰って来たピー』 しゃん@にゃん革

<http://text-poi.net/vote/54/9/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:41 最終更新: 2014.03.08 23:43

総文字数：1500 字

10位 ☆ 3.400

『最後の人間』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/54/1/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:15

総文字数：1776 字

10位 ☆ 3.400

『桜色の未来』 志菜

<http://text-poi.net/vote/54/11/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:42

総文字数：1454 字

12位 ☆ 3.000

『なるはや連辞一層次』 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/54/4/>

投稿時刻: 2014.03.08 23:25

総文字数：377 字



※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/54/>

《大賞 1 作品》

---

獲得☆ 4.182

『さあ、旅立とう』

<http://text-poi.net/vote/54/7/>

著：みお

「先輩、呪いのマトリョーシカ人形って知ってます？」

深夜残業の合間、後輩の高木が見せてきたのは 11 体のマトリョーシカ人形だった。

話半分、人形の中へ営業担当者の名を書いた紙を入れてみると、数日後、事故の連絡が!?

偶然か。呪いか。残る 10 体のマトリョーシカ人形を前に、二人は――。

呪い人形を主軸にしながらも、どこか清涼さを纏った物語が、第 15 回の大賞に輝きました！

《入賞 3 作品》

---

獲得☆ 4.100

『猫と熊と宇宙とそれ以外』

<http://text-poi.net/vote/54/5/>

著：茶屋

この物語に描かれているのは、成葉屋（主人公、おそらく）であり、成葉屋の悩みであり、

猫であり、熊であり、もしかしたらそれは甲殻類であり、宇宙である。

この物語にはマトリョーシカが登場するが、むしろ物語そのものが、マトリョーシカである。

――その意味は、読者ひとりひとりが作品から確かめてください。マトリョーシカ文学、ここに完成。

獲得☆ 4.100

『落日』

<http://text-poi.net/vote/54/10/>

著：碧

マトリョーナは、貧しかった。夫はろくに働かず、子供ばかりが次々に生まれる。

そんなある日、マトリョーナはひとりの男に出会った。男は、軍人だった。

子供のため、生活のためと物乞いを続ける彼女に、男は小さな人形を見せる……。ただただ、生きることに精一杯だった女の、心の底に大きく眠った感情を淡々と描いた物語。

---

獲得☆ 3.909

『僕の彼女はマトリョーシカ』

<http://text-poi.net/vote/54/6/>

著：晴海まどか

僕たちはうまくやっていた。些細な事でカッとなって、頭を打った彼女が動かなくなってしまうまでは。ところが次の瞬間、ビリビリビリと派手な音を立てて、死んだ彼女の中から出てきたのは一回り小さくなった彼女本人!? そして僕と、少し小さい彼女との、共同生活が始まった――。ちょっぴりグロテスクでどこか奇妙な、ラブラブ脱皮物語。果たしてその結末は……？

《特別賞》

---

《万物は桜色賞》

『わたしの生きる道』

<http://text-poi.net/vote/54/3/>

著：小伏史央

世界のすべてが桜色に染まり、桜色に囲まれ、やがてその文字からも桜色を感じる作品でした。

---

《マトリョーシカ文学賞》

『猫と熊と宇宙とそれ以外』

<http://text-poi.net/vote/54/5/>

著：茶屋

作品そのものがマトリョーシカ、という、意表を突く構造を、文学に仕上げた作品でした。

---

《狙いすぎで賞》

『ぽい投稿一周年記念 帰って来たピー』

<http://text-poi.net/vote/54/9/>

著：しゃん@にゃん革

同著者の過去作品と、別作者の登場人物を巡り合わせ、お題を消化しつつ物語に練り上げるという、

オオブタダブルヤサイマシマシのような作品でした。

関連作品はこちら

『ピー Part2』 <http://text-poi.net/vote/7/1/>

『ピー Part3』 <http://text-poi.net/vote/11/5/>

『蝶合戦』 著：茶屋 <http://text-poi.net/vote/46/1/>

——受賞された皆さま、おめでとうございます！  
素晴らしい作品をありがとうございました。



(次のページから、作品が始まります。)

《大賞受賞作品》  
さあ、旅立とう  
みお

思えば、入った職場が悪かった。広告代理店。紙だけじゃなくプログラムだって何だってする。分かってはいたが、この業界は一年通して忙しい。

別に人が死ぬわけでもあるまいに、「なるはやで」「それは早めにコンセンサスを取って……」馬鹿らしい。言葉もまともに使えないのか。

……なんてこと、心中愚痴っていたのは入社一年まで。

後輩に対して、平然とその言葉を使い始めたとき「俺も社畜になったもんだ」と一也は煙草の煙を眺めながらそう思った。

「先輩、呪いのマトリョーシカ人形って知ってます？」

後輩の高木がそう囁いてきたのは、深夜1時のことだ。

今夜はもう帰宅を諦めた。目の前のパソコンの画面からは、延々とエラーメッセージが放たれている。プログラムの不具合だ。しかし、どこがおかしいのか、どう弄っても分からない。

たぶん、睡眠不足のせいである。

ここ一ヶ月、平均睡眠時間は3時間。休日もない。終電でも、帰宅出来れば御の字で、大体が会社にお泊まりだ。そんなことに不平不満を感じる心さえ、疲弊した。

睡眠不足の目を擦り擦り、黒い画面の青い文字を必死に追う一也には、高木の言葉が飛び飛びにしか聞こえてこない。

「先輩、疲れすぎてませんか？」

「そりゃおまえ……いや、別に疲れてなんかないさ。これも仕事だからな」

高木は、一也を心配するようにつめてくる。まだ若い高木は、OBでもある一也に憧れてこの会社に入ったと豪語している。

わざわざこんな会社。と一也は思う。自分のせいで彼を地獄に付き合わせたか。と後悔することもある。

「先輩ちょっとは休んでくださいよ」

「……休めないよ。俺しか、プログラムいじれないんだし。……で、呪い？ なんだそれ」

「マトリョーシカ、ほら。これですよ。今すっごく流行ってるんです」

高木は残業がそんなに楽しいのか、若い目をキラキラ輝かせながら一也の前に一つの人形を置いた。

それは、コケシのような形をしたサイケデリックな色合いの人形である。

「中を開けると、なんと 11 個」

高木が人形を捻ると中からもう一つの人形。それを捻るとまた人形……それは 10 回繰り返された。

なるほど、ロシアのマトリョーシカ人形だ。多少、顔付きは和風な気がするが。

「……で？」

プログラムは不具合を起こしっぱなし。とうとう熱を持ち始めたパソコンから手を離し、一也は煙草に火を付ける。オフィスは禁煙だが、こんな深夜、残って居るのは二人だけ。誰も文句など言わないだろう。

「呪い。っていつてるのは後ろ暗いことがあるやつだけです、じつはこの人形……」

高木はいやな笑みを浮かべて一也の耳に囁く。

「このマトリョーシカに祈ると、恨みを晴らせるんですって。11 人までですけどね。この人形の大きさが呪いの大きさ。人形の身体に呪いたい相手の名前を書いていれると……」

高木は言葉を止めない。オフィスの電気は 8 割消している。そんな暗闇の中で囁くその言葉は不気味に響いた。

「ほら、一番小さなマトリョーシカも開くようになってるでしょ。この中に入れるんですよ」

「はは。なんだそんな馬鹿みたいな」

「馬鹿っていわないでくださいよう。これすっげえ流行ってて、俺も買うの苦労したんですから」

「買ったのか。お前なあ、金は大事に使えよ。そんなに高くないんだから、この会社の給料は」

パソコンの画面はすっかり冷えた。手の煙草も半分以上灰になってる。一也はそれをもみ消して大きく伸びをした。

「しかし。そんなものが流行るなんて、世も末だな」

「試しになんか入れてみませんか？ 先輩」

「そうさなあ……」

正直、疲れていた。

納期は毎日来る。呑気な営業は、現場の人間の気持ちも知らず、仕事を取ってきて投げるばかり。しかも俺が会社を回してるんだ。なんてデカイ顔をする奴もいる。くそくらえ、実際会社を支えているのは一也のような現場の人間だ。

「じゃあ、そのちっこい奴に、営業の……山田。あいつの名前を書こうか。そもそも、この残業はあいつの取ってきた短納期の仕事のせいだし」

「いいっすね！」

若さだろうか。高木ははしゃぎながら付箋紙に山田と書いて、マトリョーシカにしまいこむ。酷い悪筆で、これじゃ肝心の呪う対象も分からないだろう。と一也は苦笑する。

「……はい。休憩は終わりだ。仕事にもどる」

「これ、納期いつです？」

「なるはやだ」

さっきまで吸っていた煙草の残り香が苦く口の中に蘇った。

事件を知ったのは、数日後のことである。

営業の山田が、階段から足を踏み外して骨折したのだという。高木は興奮しきりの顔で一也に語り、一也は驚きのあまり手からコーヒーをおとしかけた。

しかし。

「……偶然だ、偶然」

引きつるように笑って、一也は手を振ってみせる。名前を書いただけで骨を折った？ そんな馬鹿な！

「えー先輩。絶対呪いっすよ。じゃ、次は中ぐらいの試みましょうよ」

嫌だ。と一也は思ったが口にはできなかった。高木は悪戯少年の顔をしている。ここで止めようと言えば、一也がマトリョーシカを信じていることになるし、恐れていると思われるだろう。先輩としての沽券に関わる。

「もう一気にいきましょ。そんで一気に事件が起きたら先輩だって信じるでしょ」

「じゃあ……」

名前を出したのは、ほんの気紛れ。ちょっと気に入くない上司、営業、取引先。

何とか名前を捻り出せた9名分、名前を仕込まれたマトリョーシカは、一也のロッカーに安置された。

そして数日後。

「……営業の●さんは交通事故で意識不明。課長は突然、電車で飛び込んで……取引先の●さんは……」  
通り魔に殺されました。

と、高木が珍しく真剣な顔で言って来たとき、一也は初めて吐き気を覚えた。

「嘘だ」

「本当っす」

「じゃああれは」

二人はロッカーに走る。周囲を見渡し、恐る恐る人形を見る。一番小さな人形から延々10個目までそのサイケデリックな身体の中には名前が書かれた付箋紙が収まっている。

一番大きな人形にだけは、何も名前が仕込まれていない。仕込まなくてよかった。と一也は思う。被害者は10名で留められたのだ。

「……このことは、忘れよう」

「……」

今度……いつくるか分からないが……休日の時にでも寺に持って行って、燃やしてもらおう。一也は神妙にそんなことを思った。

呪いなど、実際は無いのかもしれない。しかし、名前を書いた人物だけが事件に巻き込まれた。それは隠しようのない事実である。

「……ねえ、先輩。このマトリョーシカ、何かに似てませんか？」

「もう見るな。忘れようぜこのことは」

「いや、見て下さいよ」

高木は恐る恐る、それを持ち上げた。マトリョーシカは笑うような、悲しむような顔をしている。不思議と引き込まれる顔だ。

「11個あるところからもピンとききました……11面観音に似てる気がしません？」

言われてみればどことなく仏像に似ている気もする。しかしそう考えてぞっとした。仏が人を呪うのか。「11面観音は、苦しむ人を見つけるためにこれだけの顔があるっていわれてるんです。苦しむ人がいたら、すぐに救えるように」

一つ一つ顔が異なるのは、それぞれの役割があるからだろう。一番大きなマトリョーシカは穏やかな、まさに仏像前とした顔をしている。

「それが人を……殺したり、呪うなんて」

「この世は苦しみである。というのが仏教でしょ？　じゃあ、死ぬことは救いの……」

高木が真剣な表情でマトリョーシカを見つめている。その目の奥が、らんと輝いてるのをみて一也の背筋が凍る。

「マトリョーシカからすると、救われることなのかもしれない」

「おいおい……妙な事をいうなよ。お前、ちょっと変だぞ。仕事に疲れたか？」

冗談めいて声をかけるが、高木の顔付きは変わらない。何かを決意したような、その目つき。

「……先輩、俺、先輩をまじで尊敬してます」

高木の声と、館内放送の声が重なる。

会議をはじめます。皆さんすぐに会議室に集まってください。

呑気なアナウンスの下。高木だけが不気味なほどに真面目な顔をして一也を見つめている。

ここはどこだ。と、一也は思った。

良い香りがする。そして暖かい。確か季節は冬だったはずなのに、ここは春のような心地よさ。

どこかに寝転んでいるらしい。背は温かく、柔らかい。最高級のベッドに寝転がっているようだ。

「……ああ」

春のはずだ。一也は思った。目の前は見事な桜の園。花卉が風に踊っている。桜色の風が吹いている。

花見なんて、もう十年はしていない。春が一番忙しい時で……。

そこまで考えたとき、一也の目がはっきりと覚める。

「まずい、仕事の納期！」

立ち上がると、目の前が揺らいだ。目前はどこまでも続く桜の園。こんなに見事な場所なのに、誰もいない。

花見は人がいるからいいのである。誰一人いない桜の園は、恐怖しかない。

「……ここは、どこだ」

ぽとりと目の前に人形が落ちてくる。それはかの、マトリョーシカである。

恐る恐る拾い上げ、捻って開ける。しかし中に入ったはずの10個の人形はもう無かった。闇だけである。

ひっくり返すと、一枚の紙がひらりと舞い落ちる。

……それは。

「あなたは来世に旅立ちます」

身体をぱくりと割られたマトリョーシカが、慈悲の声で喋る。口は開いていないが、確かにマトリョーシカの声である。

男とも女ともつかない。穏やかな声である。

「いつ、旅立ちましょうか」

一也はマトリョーシカを掴んだまま啞然と立ちつくす。そして叫ぶ。その声は桜に吸い込まれる。叫び疲れたあと、やがて全てを悟った顔をして微笑んだ。

「いつ旅立ちますか？」

「なるはや……いや」



問いかけるマトリョーシカを見つめる。まるで笑っているようだ。それは、嫌な微笑みじゃない。それは慈愛だ。一也の新しい旅立ちを喜ぶ顔だ。

一也はゆっくりと大地に腰を落とした、空は晴天。舞い散る桜は青空に広がって、それはそれは見事な風景である。

「人生の境目に、なるはや。なんて似合わないな」

マトリョーシカを隣に転がして、一也は寝転がる。

そしてマトリョーシカの身体から出て来た紙を、びりびりに破って棄てた。

黄色の付箋紙には、高木の文字で一也のフルネームが書かれている。高木の悪筆に似合わない、丁寧な文字である。祈りを込めるように一文字一文字書いたように見えた。

「ゆっくりと。俺は、しばらくここで花見と決め込むよ」

久々に伸ばした身体は、大地に溶ける。桜色に囲まれて、目を閉じる。

本当に久しぶりによく眠れそうである。

投稿時刻 : 2014.03.08 23:29

最終更新 : 2014.03.08 23:38

総文字数 : 2297 字

獲得☆ 4.100

## 《入賞作品》

《特別賞・マトリョーシカ文学賞》

## 猫と熊と宇宙とそれ以外

茶屋

成葉屋（なるはや）は悩んでいた。問題は猫なのだ。だが、猫ではないかもしれない。確実に犬ではないし、おそらく魚類のたぐいでもないのであろうが自信はない。最近は甲殻類も仕入れづらくなってきたから、とりあえずは熊で代用していたのだが、どうもそれが実は猫だという噂が立っているらしいのだ。どうせ都市伝説のたぐいだろうと高をくくっていたのだけれども、どうも気になって仕方がない。気になって仕方がないから熊が実際猫に見えてくる。猫熊だ。熊猫だ。因みにどっちも同じ意味で、白黒の猫の体で顔が人間、子供の自分から聡明で一を言えば十を覚え神童と評されていたものの都会で挫折を味わい田舎に帰ってきたが昔の彼を知っていたものは誰もおらず、自分があまりにも長い時間都会で過ごしていたことに気付いて絶望のあまり都会人から渡された箱を開けてみるともうとうとう煙が立ち込め老人の姿に変わったとかかわらなかつたとか。今はそんなことより猫が問題なのだ。問題の猫なのだ。臍肭臍ではないし、やはり犬ではありえない。奇天烈なうわさ話などに惑わされてなるものかと両の目でじいっと熊を見やるのだが、やはり熊だ。毛深くて耳が二つあって目も三つあるし、八本の足でカシャカシャと音を立てながら元気に這いずりまわっている。間違いなく熊だ。猫ではない。そもそも熊を猫と見違える方が気がしれぬ。それこそオロブランコとスウィーティを間違えるようなものだ。常識的に考えてあり得ないではないか。そうだ常識で物事を考えてみよう。我思う故に我ありから出発して、途中で休憩したりもして、シュレディンガーの方程式にたどり着くのだ。そうやっと辿り着いた。長かったぜ。これで猫の生死も確かめられるってもんよ。そんなわけあって「あした天気になあれ」ってな調子でシュレディンガー方程式をぶん投げてやる。けれども波動関数がうまく機能しなかったようでどうにも結果が読めない。生と死が重なりあって曖昧だ。観測できない。こりゃ乱視のせいだな。よく見てみりゃさっきから世界が重なって見えやがる。コイツはいけませんね。どうもだめそうだね。我思ったところで我が何人もいるんじやどうしようもないって話だよ。やり直した。

成葉屋（なる早）は悩んでいた。問題は猫なのだが、なるべく早くと言われても肝心の時間が足りない。あっちこっちに寄り道したせいではあるのだが悪気があったわけではない。無邪気というやつである。そして目の前の熊/猫/熊/猫も無邪気に欠伸をしている。問題の猫である。先ほどよりもより一層よりもよって不確かさがましたような気もするがきっと気のせいであろう。少なくとも蟹でも海月でも無けれ

ば、驢馬でもない。考える葦であるはずもない。当然のことながら。いざその正体を確かめんと、とりあえず熊/猫/熊/猫のフタ部分の熊を取り外してみると中には小ぶりの猫/熊/猫/熊/猫が入っておりまして、またその頭の猫を外してみますとまたもや更に小さな熊/猫/熊/猫/熊/猫が入っており（略）熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫/熊/猫が入っておりまして、此処に至るまでだいぶ長い道のりを歩いてきたような気がするけれども、果たして此処に至るまでに何回の操作を必要としたかを答えよ（一五点、サービス問題）。まあ、辿り着いたのは極小の世界というわけでこれがプランク長かと感心しながら眺めている場合でもないのだ。スーパーなストリングだかDのブレーンだか知らんが、問題は猫なのだ。ノラや、ノラやと呼んでみても出てこない。きっと重力の井戸に落ちて死んだのだ。やり直しだ。

成葉屋（ナルハヤ）は悩んでいた。問題はやはり猫で熊/猫/（略）/猫/熊だったか猫/熊/（略）/熊/猫だったかは忘れたが、タクティカルギアでもなければレールキャノンでもない。強いて言えばプラグマティズムに近いような気もするが。やはり猫なのだ。ではその猫とは何者なのか述べよ（五点）。と言われてもてんで検討がつかない。点でわからぬのだからやはりまるでわからぬ。もちろん球でも分からぬが、ハイパーキューブまで拡張してみればわかるであろうか。しかしそんな暇はないのだ。マトリョーシカと言われているのだから。ご存じない方も多いかと思うがマトリョーシカとはなるべく急ぎでという意味だ。マトリョーシカ。マトリョーシカ。だめだ。やはり、やり直し。

成葉屋（NARUHAYA）は悩んでいたんだと思う。思い返せば良い人生だった。走馬灯のように思い出が駆け巡る。そう、あれは桜舞い散る季節でしたね。桜色の猫を追いかけて、桜色のあなたと出会いました。熊子。今あなたはどこにいらっしゃるのでしょうか。ちなみに桜色というのは、なるべく早くという意味の業界用語らしいと誰かが行っていたような気がしますがかがでしょうか。知るか！やり直し！

成葉屋（Tachypleus tridentatus）は悩むことをやめた。

成葉屋（ ）はやめた、成葉屋であることを。

（ ）はやがて芽をだす。成長し、大樹になった彼は綺麗な桜色の花を咲かす。秋には猫がなり、熊がそれを食べる。もちろん葉は多く生い茂っている。もうやり直しは効かない。引き返せないところまで来てしまったのだ。だが朗報がある。まだこれは終わりではない。猫はこれからもなりつづけ、熊は食べ続けるが、時には猫が熊を食うことだってあるんだ。やり直しが効かなければ、いつでも新しく始められる。こちらには猫と熊があるんだ。宇宙なんていくつでも作れるさ。

《入賞作品》

落日

碧

桜の木は夢を見ている。マトリョーシカだった頃の夢だ。

一年のほとんどが雪でおおわれている極寒の地だ。そこが、マトリョーナという名の女の生まれた地だった。女のしるしが来たのは14になってしばらくした頃で、村のおきてに従い、縁戚のきこりの家にとついだ。家は鬱蒼としたはやしの奥にあった。10も年上の、かもくな男とのふたりきりの生活だった。稼ぎもせず、酒を飲むとすぐに暴れる男だった。ひとり目の子どもは1年と経たずにでき、生まれてすぐに死んだ。マトリョーナは3日3晩泣き明かしたが、夫は死んだ子どもにも子を亡くした妻にも心が動かぬようだった。夫の仕事もあまりなければ、他にごらくもないから、2人目の子どももすぐに出来た。今度は死ななかった。夫は稼がぬし、子どもに見抜きもしなかった。マトリョーナは毎晩子の世話をし、家の世話をし、町へ出ては物乞いをしてその日の食べる分をかき集め、帰ってきては夫の暴力を受けた。3人目の子どももすぐに出来た。やはり今度も死ななかった。それから、4人目、5人目と生まれた。育てることができず、狼のうなるはやしの奥底へ間引いてきた。

「まるでマトリョーシカだな」

と、ある日、男は言った。物乞いをしにいった町で出会った男だった。

「マトリョーシカ？」

とマトリョーナは聞いた。

「他愛もないおもちゃのことさ」

と男は言った。

酒場で出会った男は、マトリョーナの夫と同じくらいの歳で、しかし、何もかもが違う男だった。綺麗な服を着ていて、綺麗な立ち姿をしていて、綺麗な顔をしていた。マトリョーナは小さな村で生まれ、すぐにはやしの奥底に嫁いだから、何も知らなかった。男がぐんじんと言う仕事をしているのだということも、男に尋ねて初めて知った。町の人間なら、その身なりですぐに男が軍人だと知れ、物乞いなど決してしないのだと。

マトリョーナは男から銀貨を貰い、店でありったけの食べ物を買って家に戻った。

次に会った時、男はマトリョーシカという玩具を見せてくれた。

様々な色を使って塗られた小さな人形の、腹を割ると、中から小さな人形が出てくる。その小さな人形を

割ると、更に小さな人形が出てくる。その小さな人形を割ると、更に小さな人形が出てくる。マトリョーナはそれを見ているうちに、唐突に気分が悪くなった。

「やめて」

と言ってマトリョーナは次のマトリョーシカを取り出そうとする男の手を止めた。

マトリョーナは男から銀貨を貰い、店でありったけの食べ物を買って家に戻った。

次に会った時、男は戦地に行くのだ、と言った。

「桜の咲く国だ」

と男は言った。

「さくら？」

とマトリョーナは聞いた。

「薄紅色の、儂くて美しい花だ」

と男は言った。

酒場で出会った男は、マトリョーナとはもう会うことはないと言った。遠いところに行くからだ、とマトリョーナは思った。それから、この男は最初から遠いところにいる、とも思った。

マトリョーナは男からいつもより多く銀貨を貰い、店でありったけの食べ物を買って、家へ向かったが、男の事を考えると、家に戻り難い何かが胸の内に生まれた。マトリョーナは小さな村で生まれ、すぐにはやしの奥底に嫁いだから、それがどうしてなのかわからず、しかしわからないからといって家には戻れなかった。そのうちに、マトリョーナははやしの奥深くへ迷い込んで、狼に出くわした。マトリョーナは狼に手足を食いちぎられる間、男のことを考えていた。次があるなら桜の咲く国に生まれたいと。

桜の木は考えている。マトリョーナだった頃のことだ。マトリョーシカのように延々と子どもを産み続けるマトリョーナを男が蔑んでいたのが、今ならわかった。何も考えられずあのまま家に帰っていればよかったのだと桜の木は考えている。

桜の木は路上に根を張り花を咲かせている。春になるといつも花を咲かせて、散り、葉を出して、それもまた季節が巡ると散っていく。何度花を咲かせても、桜の木は何も生み出すことはない。

桜の木が根を張る桜並木は学校の近くにあって、時折、満ち足りた笑顔の学生が、肩を寄せ合いゆっくりと歩いていく。マトリョーナは小さな村で生まれ、すぐにはやしの奥底に嫁いだから、そんな時に胸の内に生まれる心のことを何も知らなかった。

春、桜の木は時折涙を流す。桜色の涙が満ち足りた男女の上に降り注いでいる。

投稿時刻 : 2014.03.08 23:34

最終更新 : 2014.03.08 23:44

総文字数 : 4025 字

獲得☆ 3.909

《入賞作品》

僕の彼女はマトリョーシカ

晴海まどか

僕はカッとしやすい。

そのときも気がついたら彼女を突き飛ばして、ああごめん僕が悪かったよって彼女のもとに駆け寄って、痛かったねなんていつもみたいに頭を撫でて、愛しい彼女にこんなことをしてしまう僕はなんてバカな奴なんだって自己嫌悪に陥るはずだったのに。

彼女が倒れた床の上にはなんだか赤いものが広がっていて、体を横にして倒れた彼女は声をかけてもピクリとも動かなくなっていた。

ちょっと力の加減を間違えた、彼女が倒れた先にテーブルの角がちょうどあった、運が悪かった、僕が悪かった？ いやそんなまさか。

呆然と立ち尽くして自問自答を繰り返していた時だった。

パンッとポテトチップスの袋を勢いよく開けるような、空気が弾けるような音がした。

彼女の額から顎にかけて、大きな亀裂ができていた。血は出ていない。ただただぱっくりと、肌が割れて峡谷を作っている。

やがてその亀裂はあごを通過して首に向かい、服の下に伸びて行った。彼女の顔は包丁で魚のお腹をさばいたみたいぱっくりと割れていて、どちらかと言わなくても丸い目と控えめな鼻口はかわいらしかったのに、左右に別れたそれらは目をそむけたくなるくらい醜く魚人みたいになっていた。顔のパーツをバラバラにして遊ぶ福笑いのリアルバージョンを見ているみたいだ。あんなにも愛しかった個々のパーツが、バランスを崩すだけでこんなにも醜悪なものになるとは。

何が起こったのかわからなくて、彼女にできた裂け目を凝視していた。すると。

がばっと彼女は上半身を起こした。そして自ら顔の裂け目に両手をかけると。

思い切り左右に皮膚を引っばった。

ビリビリビリ、という皮膚が裂ける嫌な音がして、声にならない悲鳴が喉の奥から漏れた。ぎゅっと目をつむる。ビリビリはまだ続いている。

「あー、びっくりした」

なんとも呑気なその声に、ゆっくりと目蓋を開いた。

彼女の顔はもう裂けてはいなかった。僕の知っている、綺麗な黒髪にシュッとした眉、目鼻のバランス

がいい彼女の顔。その代わり、その首の周りには取り出したばかりのホルモンみたいな、つやつやした桜色をした皮がマフラーみたいについていた。彼女はやたらと伸縮性があるらしいその皮を引っぱった。よく見ると、それには黒い髪の毛もくっついている。

「脱皮しちゃったみたい」

風呂場で残りの皮もむいてきた彼女は、一回り小さくなっていた。さっきまで着ていた服がぶかぶかで、袖が余って指先がちょっと覗くくらいになっている。身長も十センチくらい縮んだみたいだ。

皮をはいだついでにシャワーを浴びたらしい彼女の髪はまだ濡れていたが、僕はそっと手を置いてみた。確かに彼女の髪だった。そのまま顎や首にも触れてみる。ちょっと小さいけど、覚えのある感触だ。

「びっくりしちゃった。思わず死んじゃったじゃない」

彼女はからっと笑う。

「気をつけてよね」

頬を膨らませ、ぷんすかと怒る彼女に安堵し、泣きそうになった。

「うん、ごめんね」

抱きしめた彼女は小さくて、中学生くらいの女の子を抱きしめているような錯覚がした。

彼女は僕の手を引き、風呂場につれていった。彼女が脱いだ皮があった。引っくり返った皮の内側は先ほど目にした桜色で、外側は僕が知っている彼女の肌そのままだった。人が脱皮するとこんな風になるんだ。手の爪や髪の毛はついたままである。彼女が二人に増えたような気が一瞬したが、すぐに自分が握っている彼女の少し小さくなった手の感触を思い出し、強く握り返した。

「これ、どうしたらいいと思う？」

どうしたら、と言われても。

「燃えるゴミに出したら……騒ぎになるよね」

バラバラ死体として扱われそうだ。

「私の皮をゴミに出すの!？」

くわっと牙をむく猫みたいに険しい顔になった彼女に、そんなことしないよ、と必死に謝る。彼女にひどいことをしてしまったばかりなので、今の僕は立場が弱い。

「でも、どうしたらいいかな」

脱皮した人間の皮をどう扱っていいのかなんて、いくら優秀なサラリーマンの僕でもわからない。葬式をして供養するわけにもいかないし。

「いいこと思いついた。食べましょう」

ぽんっと手を叩くと、彼女はシャワーのノズルを捻った。彼女は頭からお湯をかぶってしまうが、気にした様子もなく、拾い上げた皮をお湯に晒した。端っこから順番に伸ばし、両手でこすっていく。

「今までお世話になった私の皮なのよ。食べて栄養にするのが一番の供養だわ」

皮を隅から隅まで丁寧に洗い、どこにそんなものを持っていたのか、梅酒でも作れそうな大瓶を抱えて持ってきて、彼女はその中に切り取った髪の毛や爪を入れた。これは食べられなさそうだから、大事にしまっておく、だそうだ。

残りの皮は小分けにしてジップロックにしまい、冷凍した。翌朝から、彼女は毎朝自分の皮で色んな料理をこしらえた。

彼女が作る料理は基本的においしい。料理上手な点も僕が彼女を大好きな理由の一つだった。けど、さすがに彼女の皮を食べるのは僕の本能に近い部分が拒否をした。人として超えてはいけない一線のような

気がしたのだ。

けど、彼女は自分の皮を使った料理しか作ってくれなかった。唐揚げ、フライ、トマト煮込み、カレー。彼女の料理が食べられないのでスーパーのお惣菜ばかりを食べていた僕だったが、彼女の料理が食べたくて食べたくて、一週間が経ったある日、とうとう我慢できなくなった。

彼女の皮の煮込みは、これまでに食べたどんな料理よりもおいしかった。自分が踏みとどまっていた一線のなんとばかばかしかったことか。

こうして、僕は彼女と一緒に彼女の皮を毎日食べるようになった。

けど、どんなに美味しい皮でも、いつかは尽きる。

「これで最後なの」

彼女がそう告げたとき、僕は絶望のあまり彼女に掴みかかった。そんな悲しいことを言わないでほしかった、ただそれだけなのに。

彼女は足を滑らせ、引っくり返った。そのまま動かなくなった。

――数分後。

倒れた彼女の顔が、ぱっくりと割れた。

彼女はまた一回り小さくなった。

身長はさらに縮み、小学生くらいの大きさになった。小さくなったのが身長だけならよかったのに、彼女の体はドラえもののひみつ道具・スモールライトを当てたように全体が小さくなってしまった。ちょっと、人として不自然なレベルだ。なので、僕は彼女を隠すことにした。彼女はこれからどうしたらいいの、としくしく涙をこぼしたが、僕は優しく抱きしめた。すべては僕の責任だから、僕がこれからも君を守っていく、と。

こうして、また彼女の皮を僕は堪能できるようになった。

だけどやっぱり、皮には終わりがやってくる。

冷凍保存していた皮がなくなるやいなや、彼女は僕を見て怯えた表情を見せた。いや、理由はわかるんだけどさ。僕は彼女の皮が食べたくて仕方がなかったんだけど、小さな彼女に首を振って優しく笑んだ。僕は君を守るって決めたんだ。もう酷いことはしないよと。

その晩、彼女が眠っている隙に、その頭を叩き割った。彼女の意識がない間に襲ったのは、僕のせめてもの気遣いである。

びっくりして目を覚ました彼女の顔はまた割れて、さらに小さな彼女がその中から出てきた。嘘つき、サイテイ、ヒトデナシ！　僕をなじって泣きながら叩く彼女はでもあまりに小さくて、かわいらしすぎた。身長一メートルもない。叩かれてもまったく痛くない。

小さな彼女にもはやキッチンに立つことは難しくなっていたので、僕は彼女に教わりながら料理を始めた。泣いて怒った彼女だったが、皮をぞんざいに扱われるよりはマシと思ったのか、料理自体は懇切丁寧に教えてくれて、僕はますます彼女を好きになった。

小さくなった彼女の皮だったので、あっという間になくなってしまった。

最後の皮スープを飲み干したあと、隠し持っていたハンマーで食卓の向こうに座っていた彼女を殴った。倒れた彼女の顔がパッキリ割れて、出てきた彼女はちょっと大きなお人形さんくらいのサイズになっていた。

ごめんよ、とハンマーを投げ捨て、両手で小さく小さくなった彼女を抱いた僕に、彼女は意地悪く笑った。

「もう脱皮はできないよ」



今回冷凍した皮が本当に本当の最後。

もったいなくてもったいなくて、僕はなかなかそれに手を伸ばせなかった。けど、お腹は空く。欲望には勝てない。一週間で僕の断皮生活は幕を降ろした。

我慢していたせいで、三日も経たずに皮はなくなってしまった。僕は声を上げて泣いた。そんな僕の背中を彼女は優しくさすってくれる。大丈夫、大丈夫、と赤子に話しかけるような声をかける。

「いい考えがあるの」

今日はまだゆっくり休んで、とお人形さんみたいな手で僕の手を掴んでくれる。こんなに小さくなくても僕を気遣ってくれる彼女を、僕は心から愛しいと思った。

「だから、あなたはなるはやでベッドに入って」

なるはや、だなんて物言いにちょっと笑って、わかったよ、と僕は立ち上がった。

ぐずぐずと鼻をすすりながらパジャマに着替え、ベッドに横になった。オレンジ色の豆電球でぼんやりとした寝室に僕は一人でいる。こんなときこそ、人形のように一一いや、もはや人形と区別がつかないかわいらしさの彼女を抱きしめたいのに。口の中に溢れてやまない唾液を飲み込みながら、もんもんとしているときだった。

ガタン、と何かが倒れるような音がした。

黒い影が僕の顔目がけて近づいてきた。それがベッドの脇に置いていた電気スタンドであると気づいたときには、視界がブラックアウトした。

「……気がついた？」

彼女の声に、意識を取り戻す。なんだか体全体がごわごわしていて、うまく動けない。

「最初はみんなそんなものなのよ」

聞き覚えのある、ビリビリビリ、という皮が裂ける嫌な音がして、僕の視界が開けた。

お人形さんの彼女が僕の顔を見下ろしていた。

「今度はあなたの番よ」

ゆっくりと体を起こし、顎から首にかけてまとわりついているごわごわした何か一一皮膚と髪の毛の感触に気がついた。

「あなたはあと何回、脱皮できるかしら」

## なるはや！

永坂暖日

白衣の裾をひらめかせて颯爽と廊下を歩き、ややもすればずれ落ちる保護めがねを、眉間のあたりに人差し指を当ててきりりと持ち上げる。扉の向こうにあるのは、様々な実験器具と分析機器がずらりと並ぶラボラトリー。女性諸君、わたしを見てキャーキャー黄色い悲鳴を思う存分上げて構わない。それもやぶさかではない。

そう、わたしは理系男子にして眼鏡男子の鳴瀬隼人。学生時代は「なるはや」などという二つ名もあった、鳴瀬隼人である。名前は大事なので、思わず二回も言ってしまった。

私服のシャツは、もちろんチェック柄。シャツ形の服となるとその占める割合が多い。理系男子として、そこは外せない。今白衣の下に着ているのも、もちろんユ○クロのチェックのシャツだ。水玉模様のシャツなど、コンタミと言っていいレベルでしか所有していない。

失敬、分析漬けの毎日だから日常でもついつい専門用語を使ってしまう。手を繋いで歩いているカップルを見れば、あれは何結合になるのか、二人を引きつけている力はファンデルワールス力よりも強いのか、などと討論してまうのだ。合コンでこんなことを言えば、初めは「すごーい！」と羨望の眼差しを向けられるが、そのうち引かれてしまうのでなるべく控えるようにはしている。

魂までは分析屋になるまいと思いつつ、もはやなりつつあるのではないかと危惧しつつ、日々黙々と仕事をこなすわたしを見て、上役はわたしを 3S 委員に任命した。

説明しよう！ 3S とは整理 (Seiri) 整頓 (Seiton) 清掃 (Seisou) の頭文字 S を取った、三つの S のことである！

つまりは、実験中など特に散らかりがちな実験台や分析機器の周辺を常に綺麗にしておきましょうね、という心づもりのことである。

実験台を綺麗に片付いた状態にしておくことは、KY の観点からも重要である。おっと、KY とは「空気読めない」のことではないのであしからず。危険予知、すなわち Kiken の K と Yochi の Y のことである。労災ゼロを目指す上でも 3S と KY は必要不可欠な活動なのである。

そんな重要な委員の一つに任命されたわたしは、早速自分のラボの 3S に取りかかった。

数日前に調整してそのままになっているメスフラスコの放置などもってのほか！ 測定の済んだバイアルも即刻廃棄！ 分析試料の仮置き表示など無意味無意味！ ビーカーはマトリョーシカのごとく大きいものに小さいものを順番に入れてすっきり収納！ いったいつからあるのかもよく分からないような溶液にはフェノールフタレイン液を垂らして pH 確認！ 桜色程度のアルカリ性なら大量の水道水で希釈

して流してしまえば問題ナッシング！

エブリシング、ベリー 3S！

わたしは自分の仕事に満足していた。実験台はすっきりと片付き、分析機器の周辺も驚くほどものがなく、オートサンプラーの中にも何も無い。

上役にこっぴどくしかられ同僚には白い目で見られ、当分事務仕事だけしておけと化学分析の入門書を叩き付けられラボから閉め出されたわたしには、その理由が未だ皆目見当付かなかった。

## けむたくない

めぐる

最後にいつもの挨拶をゆっくりと読み上げて、ゆるやかにBGMが小さくなっていくのを聞き届ける。自分の声に余韻を感じるなんて自惚れているかもしれないけれど、ラジオ局の一日をしめくくる深夜3時なら似合わないことでもないだろう。

ガラスの向こう側でも大体は肩の力を抜いて一息してから片付けなどを始めるのだが、今日はやけに忙しそうに動いている。打ち上げの場所まで決まっている雰囲気だ。

「桑名さん、今日は焼肉っぼいですよ」

だから撤収はなるはやで。スタジオを出るとディレクターの八木君が何故か耳打ちで教えてくれた。こんな時間からでも、探せばそれなりに深夜営業をしているお店は見つかるものだ。春に番組を始めた時にはファミレスに行くこともあったけれど、以前深夜を担当していた先輩に教えてもらったり番組で取材をしたりする内に5時まで、7時まで、と飲み屋や食堂がころころと発掘されてきた。

その後プロデューサーの鶴橋さんの号令で車に乗り込み、私達は焼肉屋を目指す。ダイエットをしていると聞いたばかりの気がするADの名張さんも付き合いでは思えない目の輝きをもったまま隣に座っていた。

「おいしそうですね」

食べる前からとろけそうな顔をしている名張さんが、テーブルに並んだ桜色の豚やら牛やらのお肉を見回した。

そのまますぐ食べられるならつまんだら伸びるんじゃないかってくらい更にとろけた顔を見れるのに、焼肉というのは目の前の網に肉を乗せて具合を見て、全員が満遍なく食事できるように配慮しなければならない。

八木君がここに初めて来た時激しくA型だと主張していた。

それからは八木君まかせだ。時々名張さんが焼け具合に、鶴橋さんが取り分けの分量に口を挟む。

私は商売道具で店員さんと呼んだりするくらいだろうか。

「春にある、卵に色をつけて隠すってやつ、何でしたっけ？」

そういえば鶏肉がないですね、という名張さんが驚きの方向に話しを持っていった。

「マトリョーシカ？」

牛タンがじゅっと油を落とす音が聞こえてからようやく、

「イースターだよ。かすりもしてないじゃないか」

鶴橋さんがツッコミを入れてくれた。

「で、鶏肉頼みましょうか？」

ひと段落した所で呼び出しボタンに手をかける。

名張さんはマトリョーシカがツボに入ったみたいでお腹を抱えているし、八木くんは壺漬けカルビまで頼もうとしているし、鶴橋さんはあきれて烏龍茶を飲んでる。

今月末で番組が終わってしまうなんてうそみたいだ。

《万物は桜色賞》  
わたしの生きる道  
小伏史央

わたしは桜風吹のなかを駆けていた。桜色の空、桜色の地面。そこは華やかで息苦しい、春の息吹だ。桜が二列になって平行に並んでいる。その間をわたしは駆けているのだ。え？ なぜ駆けているのかって？ そりゃあわたしは、遅刻寸前なのだから。

走れ、走れ！ 腰を低くして足を押し出すようにして、わたしは走る。頭のなかは桜の色のように滲んだピンクに染まっていて、それは、かんかんと鳴り響いている警鐘だった。

桜の花びらが舞い上がる。視界が桜色で飽和される。それでも両脇の桜の木は、裸になる気配は一向になかった。無尽蔵の色がなだれ込むなかで、走る、走る。

どこへ向かって走っているのだろう。いやそれは学校に決まっている。わたしは今日、入学式なのだ。高校生活、一日目。着たての制服を体になじませながら、走る。走る。

わたしは桜色の宇宙を走っていた。その宇宙にとってのダークマターが、桜色なのだ。おかしいけれど、わたしにとってのおかしさの基準は、わたしの宇宙にあるのだから、この桜色の世界のなかでおかしいということはおかしかった。

わたしは走る。宇宙を宇宙たらしめている法則が、まるであべこべだった。いや、あべこべだと感じるのは、わたしの元いた宇宙と比べてのことなのだから、この宇宙にとっては、当然のことであるに違いない。その宇宙にはタキオンが実在した。だからわたしは、容易に光よりも速く走ることができた。わたしは走る。走る。

走ってゆくと、巨大で矮小な惑星が、内側と外側をくりかえし入れ替えているのが見えてきた。それはきっと、わたしの宇宙でいうところの自転であるに違いない。地表は次の瞬間には地底になり、地底が一瞬後には地表になり、そしてまた地底になり。その運動自体がコアのような作用をもたらしている。その惑星には生命体があった。その生き物は、地表にいる間は昼間を享受し、地底にいる間に眠りに入る。規則正しい生活を続けていた。わたしもこうやって規則正しく生活していれば、寝坊なんてしなくて済んだのかもしれない。わたしは走る。

どこへ向かって走っているんだっけ。

次にわたしが走っていたのは、桜吹雪のなかだった。並木道になっていて、その木々はどれも桜の木だ。

わたしの入学を祝福するかのよう、わたしの視界を桜色でいっぱいにする。それは嬉しくはあったがうっとうしくもあった。視界が桜色であることは、わたしの宇宙にとってそれはそれは当然のことであり、その当然であることをわざわざ大量に押し付けられても、反応に困るというものだ。

なんの話だっけ？ そうだわたしは遅刻しそうなのだった。どこに？ どこだっけ。わたしはがむしゃらに走る。走っているとなんだか救われたような気がした。たぶん気のせいだと思う。

なるはやでお願い。そう言われたからわたしは超特急で走った。誰に言われたのだっけ。わたしは走った。光よりも速く。ときに光よりも遅く。その宇宙は桜色にあふれていた。それは新しい季節の息吹だ。え、そうだっけ。わたしは桜並木のなかを走っている。なんの話だっけ。わたしはいま走っている。宇宙を走っていると桜並木を走っているとマトリョーシカのようなものが視界に突然現れてわたしは驚いた。わたしは走っていると宇宙のなかに内包されている桜色の宇宙に入り込んでいた。そしてまた、桜色の宇宙を走っているとそのなかに内包されている桜並木のある宇宙に入り込んでいた。そしてまた、そこを走っていると桜色の宇宙が現れるのだ。マトリョーシカは内側と外側を絶えず入れ替えて自転していた。わたしは走る。

どこへ向かっているのだっけ。

なるはや人生の落としどころはつけといたほうが楽よ。お母さんが言っていた。わたしは走る。この先へ進まないコースを。高校生活一日目からもうずっと抜け出さなくていいの。わたしは走る。なるはやなるはや。どういう意味だっけ？

コースアウトなんてしない。

投稿時刻 : 2014.03.08 23:24

最終更新 : 2014.03.08 23:26

総文字数 : 1734 字

獲得☆ 3.600

## 「なるはやで桜色に塗ってください」

碓氷穰（元うわああ（ry））

「なるはやで桜色に塗ってください」

そんなことを言われたので、私は今こうして桜色のペンキを調合している。「なんでまた桜色なんだ」なんてことを考えるが、先方がそう言っているのだから仕方がない。私はそれに従うしかないのだ。

桜色はピンクの中でも比較的白の配分が多い。赤と白を混ぜ合わせてピンク色を作れば、それはそれで要求に近い色ができるはずなのだが、桜をイメージする淡いピンクにするためには白を多めにして赤を薄めるのである。

同系色の茜色や朱色、それに蘇芳なんかに比べればよっぽど軽いイメージのする色である。

ツン、と薄め液のシンナーの匂いが鼻を衝く。

でまあ、そんな風にして調合された塗料を私はいろんなところに塗っていく。今回はどうやらマトリョーシカに塗るらしく。木彫りのマトリョーシカが私の机の上に並んでいる。

それも無彩色で。

無彩色のマトリョーシカは材料である木がむき出しの、なんだか幾何学的な形をしていた。

これに近い形は、私は地域のお祭りで使用するお餅を思い出すのだが、それはそれでどうでもいいことなのかもしれない。

で、今回はそれに筆で彩色していく。エアブラシで一気にやりたい感もあるが、それだと民芸品の感触がうまく出ないそうなのだ。やはり手塗なのである。

念のため有機ガス用のマスクをして（別にこの程度の塗装じゃこんな装備いらんかもしれない）さっそく塗りに入る。

平筆と細筆をメインに使う。塗料をなるべく薄めて、伸びやすいようにしておく。背面は平筆で一気に塗ってしまう。それから表側は細筆で丁寧にライン取りしておく。後から顔を書かないといけないし。

大きいものから、小さいのを順番に。マトリョーシカのくびれはなかなかセクシーである。

よく、男性が女性のくびれに興奮したりするが、それと同じ魔力がマトリョーシカにはあるかもしれない。

マトリョーシカのくびれ。その幾何学的空間は限りなく宇宙的であり神秘的である。そのカーブの曲がり方は極めて数学的であり、ニュートンやオイラーまでもをこの曲線で魅了しうるのである。

くびれ。いくら微分や積分でその解を求めようとも手に入らないあのくびれ。くびれに恋をした幾何学は宇宙の深淵に落ちてゆく。そこはきつとどろどろしたなま暖かい何かが充満していきつと息が詰まり



そうになるに違いない。

それはきっと、開いても開いても中身が出てくるマトリョーシカ的地獄だろう。だからと言って私はあきらめようとはしない。たとえ素粒子レベルになっても、そのマトリョーシカ的地獄を泳ぎ切って見せるのだ。

マトリョーシカ的地獄は無限の入れ子構造を見せ、それは終わるところを知らない。箱の中に箱がある。その箱の中にまた箱がある。またまた箱があり、また箱がある。

そしてマトリョーシカの女神。くびれ女神。いくら誠意を見せようとも、いくらお金を積もうとも、いくら尽くそうとも、マトリョーシカ女神は私になびくことはしない。

無限の入れ子構造と計算と。果てなき欲望と叶うことのない夢。マトリョーシカの見せる悪夢に私の精神は悲鳴を上げている。桜色のマトリョーシカが私の方に迫ってくる。やめて。どうか助けて。私を中に入れなくて。あなたの中に入ったらもう出てこれないかもしれない。あなたの中は無限の入れ子構造。もうだめなの。私とあなたはもうだめなの。

#

そんな夢を見て目を覚ました。外では鶯が鳴いている。暖かな陽気だ。桜なんてとっくに散っている季節のはずだ。

目の間にマトリョーシカが転がっている。それは桜色に塗られていて、塗料はもう乾いていた。

あれ、これ受注したのいつだっけ。

私の頭はずきずきと痛んだ。そんな時、突然電話が鳴る。どうやら、受注先からのようだった。

「あ、マトリョーシカ、できてる〜？」

男性の明るい声が受話器越しに響く。

「あ、はい。何体かはできてます。残りももうすぐ終わる予定です」

「そうそう。それならオッケー。ちゃんと納期守ってね」

「はい。分かりました」

そう言って私は電話を切った。

桜色のマトリョーシカが見せた白昼夢が私を何処かへと連れ去った。私はいろんなところに行ったし、どこにも行かなかった。

ずきずき痛む頭を抱えながら私は残りの仕事に取り掛かる。また外で鶯が鳴いた。

春が私をおかしくする。

投稿時刻 : 2014.03.08 23:41

最終更新 : 2014.03.08 23:43

総文字数 : 1500 字

獲得☆ 3.500

《狙いすぎで賞》

## ぽい投稿一周年記念 帰って来たピー

しゃん@にゃん革

ピーがこの国を訪れて一年が経とうとしていた。

最初は休暇のつもりだったのに、すっかり根が生えてしまったのには一つの理由がある。

スナック菓子が美味すぎるのだ。

南国の妖精にとって今年の冬の寒さは相当に堪えたが、甘さを丁寧に抑えた飴やチョコは故郷のそれらとは比べ物にならない。

ぬいぐるみのような外見も、ピーにとっては幸いした。

街を歩けば、誰かが声を掛けてくる。

渋谷界限では、今やハチ公と肩を並べる人気と言ってもいい。

先月の大雪の際には、ピーの姿を象った雪だるまが道玄坂に並んでいたという。

その日、ピーはコンビニで買った桜色のドーナツを頬張りながら鍋島松濤公園に向かっていた。

春が近づいていたせいか、野原を跳ねるウサギのように尻尾がくるくると回っていた。

新商品のストロベリー味のドーナツも、悪くない味だった。

億単位の家々が並ぶ通りを歩きながら、けれどもそろそろ故郷に戻ろうかとも思う。

妖精の加護を失った故郷は荒れていた。

大規模なデモが繰り返され、政治的指導者は求心力が疑問視されていた。

この国のスナック菓子と別れるのは惜しいのが、生まれ育った集落が心配だ。

ただ、何かしらの恩返しはしておきたい。

この一帯に住む金持ち連中はどうでもいいが、自分に接してくれた人たちには幸せになってほしかった。

そうして公園に着くと、噴水池を囲むベンチのひとつに見覚えのある顔があった。

外回りの途中なのか、なるはやでお願いします、などと携帯電話で話している。

「なあ、お前、誰だっけ？ 前にどこかで会ったよな」

通話を終えた男に、ピーは声を掛けた。池の中では、亀が甲羅干しをしている。日差しは徐々に暖かくなっていた。

「ん、そうだったかな。ところで、君はこの辺りでは有名な妖精なんじゃないか。本当にいたんだね。お目にかかれて光栄だ」

ということは初対面か、と思いながら、ピーは男の目を見詰めた。どうやらこの男はつい最近、奇妙な体験をしたらしい。そのせいで、足元が揺らいでしまっているのだ。それは極めて稀な現象だったが、ピーも知っている。無数の蝶が目の前で羽ばたき、空へ向けて壮大なカーテンをかけるのだ。

「ほお、妖精の俺には分かるぞ。お前、あれを見たのか。なるほど、それでそんなに複雑な表情をしていたというわけか」

そう口にした瞬間、男は何かを悟ったように肯いた。

「君はきっと記憶を読み取れるんだね。そうだな、あれほど美しいものを見ると、後が困る。その時は得も言われぬ感動に包まれるが、その反動で途端にこの世の中が虚しくなってくる。あの爺様の気持ちが、今なら分かる」

「ちょうどいい。俺は今、人助けをしようと思っていたところだ。お前が見た蝶合戦など、取るに足りないものだということを教えてやる。よく見ておけよ」

そうして、よっこらしよとつぶやくと、ピーは柵を乗り越え、石の上の亀を一匹手に取った。さらに手近な木の枝を折ると、口にくわえて亀の甲羅を二度三度と手でさする。甲羅にはいつしか薄い羽が生え、そして大きな蝶へと変わっていた。

「ほらよ」

蝶を放り投げると、まるでマトリョーシカのように小さな蝶が次々と生まれていった。公園は無数の蝶に覆われ、その渦の中心にピーと男が立っていた。

「な、こんなのは朝飯前だ。お前が見たものは特別なものじゃない。そろそろ日常へ帰れ。沖縄とかいう場所では、お前みたいな奴は、マブイを落としていると呼ぶらしいぞ」

そしてピーは、ポケットからグミを取り出すと口に放り込んだ。

蝶はやがて、山の手通りの方角へと飛んで行った。

故郷へ帰る前に、この辺りの豪邸から金目のものを頂戴していくか。

尻尾をくるくると回しながら、ピーは公園を後にした。

## 最後の人間

犬子蓮木

桜が散っていく。

風が吹き、花びらがななめに流れるように落ちていく。地面はもう花びらでいっぱいだった。そのどれもが元のような綺麗な桜色ではなく、汚れくすんだ茶色に染まり、それから、終わってしまった命を嘆くこともなくただあるがままに朽ちていく。

世界はうつろぐ。

鳥が曇り空を舞い、川は濁ったままで流れていく。いつかはどちらも晴れるだろう。そのいつかは、ある程度約束されていて、だけど遠い遠い未来のことだ。

未来は輝いていると誰かが言っただろう。

過去は黒い卵のように静寂で、ゆっくりと音を立てて殻にヒビが入っていくイメージ。現在はそんな割れそうな卵の前で、中身を楽しみにしている子供なのかもしれない。その子供の目は輝いていることだろう。割れた卵の中身から、雛も生まれず、また卵が、そう、マトリョーシカのように繰り返し繰り返し幾重にも表れるのを見るまでは。

そうして絶望が生まれる。

否、生まれたのは諦めである。

なんと卵が割れるのを見ただろう。なんとその中から、また卵が表れるのを見ただろう。子供は泣き出して、もう卵を見ることはやめてしまうかもしれない。子供は怒って、卵を上から叩き割ってしまうかもしれない。百億の重なる殻の下に、空虚で小さな希望の雛がいることに気付かずに……。

夢を見ていた。

輝かしい過去の夢を。

繁栄していた。繁殖していた。繁雑で、複雑で、混線した感情を持った人間達が、世界を空気のように覆っていた。それは人にとって輝かしい過去の卵。叩きつぶしてしまった死の卵。誰もが未来を望んでいたのに、潰れてしまえば、そんな卵があった時代が眩しくて仕方がないはずだ。

現在をただそのままに見るとしよう。

つらなるはやまのようにかさなったおびたしいまでのひとのしたい。

世界は血すらもなく汚れてしまった。桜のように風情良く散る瞬間すらもなかった。みんな内側だけが

ついでってしまったのだ。だから崩れて落ちた肉体だけが残っている。

地球は言った。

「これでなんどめだろう」

地球は言った。

「だけどこんかいはすこしちがう」

地球は言った。

「いくらかはやく」

地球は言った。

「ひとりたりない」

地球は言った。

ゆえにまだ終わってはいない。

最強の矛と最強の盾が存在する。どちらが勝つか？ それは勝利の定義の問題でしかない。矛はあるひとつ以外の数十億のすべてを滅し、盾はそのマイナスひとつだけを守り抜いた。たまたま所有者が同じであったのだ。矛と盾、どちらが勝ったか、君に決めることができるだろうか？

そんな君はもう存在しない。肥やしにあふれた世界を駆ける犬は、矛盾という言葉を知りはしない。今、目を覚ましたばかりの猫は、あくびをして、またもうひとねむりはじめた。

ある架空の問いがある。

『宗教戦争をなくすにはどうすればいいか』

答えは簡単に二つ浮かぶだろう。すべての宗教が統合されてひとつとなるか、すべての宗教が消滅して無となるか。ゼロとイチ。大きく違うそのふたつが、ともにある方程式の解であるのだ。

今はどちらかはわかりはしない。

入力された値がどちらかを知ることはできなくとも、結果は常に存在する。

世界に平和が訪れた。

もちろん定義次第ではあるのだけど。

狼が鹿を襲っている。

鴨が虫をついばんでいる。

もしかしたら、まだまだ数兆の宗教が彼らの中にあるのかもしれない。けどそこまでの責任を持てる人間はいない。

明日は、だいたいやってくる。

地球が太陽が壊れる日までは、約束されたシンプルに輝かしく眩しい未来だ。夜という過去よりは明確に明るい。けどもう少しさかのぼれば、同じ明度の過去もあつただろう。忘れてさえいなければ。

叫んだ。

歌った。

笑った。

泣いた。

膝をついた地面は固い。ほんとうはもっとやわらかかったところを人が固くしたのだ。固い地面が人間だったものを受け入れてくれはしない。最適解のコンクリートロードは、余計な能力を持ってはおらず、ただ屍肉をあさる動物のための食卓となる。

もういいだろうか。

旅に出るとしよう。

世界はどこだって同じ光景のはずだ。目の前の景色は大人しく、遠く遠くの景色もきっと大人しいだろ

う。そんな想像を確かめるために、旅に出る意味がある。

はじまりでも終わりでもなく、ただとある出力の結果が、続いている世界のスケジュールに刻まれたに過ぎない。

地球は、少しだけまわって、また目を瞑った。

<了>

## 桜色の未来

志菜

「見積もり期限には今週中ということだが、今回は複数社での相見積りと聞いている。返答が早いに越したことはない。なるはやで頼む」

上司、三上の言葉に、後輩の田中は声を潜めて隣の席の私に尋ねた。

「なるはやって、なんすか？」

「なるべく早くってことや」

質問が聞こえていたのか、向かいの吉田が同様に、声を潜めて答えた。

大阪営業所出身の彼は、こっちに移って数年経つが、まだ大阪弁が抜けないらしい。いや、あえて大阪弁を直そうとしないのか。以前に『大阪弁で話していると、女の子たちが面白がってくれるんや。お笑いブームのお陰で、大阪弁に慣れてきたちゅうのもあるんかも知れんな。得意先でも覚えてもらえやすうて、特することも多いんや』と得意そうに言っているのを聞いたことがある。大阪弁はともかく、彼の押しの強さ、平気で会話に割り込んでくる厚かましさにはいつまでたっても慣れることはできないのであるが。

そんな私の内心など気付かぬ風に、田中は薄笑いを浮かべながら吉田に頷いた。

「あー、なるべく、はやく、で、なるはや、かあ」

「なんしか、急いでやれちゅうことやな」

「なんしかって、なんすか？」

「もちろん」

三上は、こちらを見ながらいっそう声を張り上げた。十人にも満たない部署の中での内輪話に気付かないはずはない。吉田と田中を見つめながら、重々しい口調で言った。

「もちろん、最優先されるべきは値段だ。ここで取っておかないと次に繋げることはできん。赤を出す覚悟でやってくれ」

それだけを言うと、さっさと部屋の中央にある自分の席へと戻った。

私は小さくため息をつき、わずかに逡巡した後、資料と背広を手にしながらか立ち上がった。

「吉田さん、設計の手配は頼みます。田中、本多工業へ行くぞ」

「え、わざわざ行くんすか？」

「こういう無理を頼む時は、メールやファックスより出向いたほうがいいんだよ」

「そんだけ本気やちゅうプレッシャーを相手に与えることができるからな」

訳知り顔で言う吉田を無視して、私は部屋を出た。

値段を下げるということは、こちらの努力以上に、下請けに無理を負わせることが大事だ。より、値段を負けさせるか。次に繋げるという言葉が餌に、ギリギリのところまで値段を下げさせる。

滅多にないことなら、今回だけ泣いてくれとも言えるが、このところずっと無理を言い続けている。無条件で10%の協力値引きをさせているにも関わらずに、だ。

本多工業の社長の泣き顔に似た愛想笑いを思い出しながら、私はもう一度ため息をついた。

しかし、本多の社長も我が社以上にその下請けに無理を言っているに違いない。ピラミッドの底辺に行けば行くほど利鞘が低くなっていることは当然の理なのだ。

親会社、子会社、孫会社、その下請け、その下請け、その下請け……取り分が少なくなるさまはまるで、マトリョーシカのようなものだとも思う。

「大丈夫ですか？ 顔色悪いっすよ」

車に乗り込んだ私に、運転席の田中が怪訝そうな口調で言った。私は鞆を胸に抱えたまま、小さく頷いた。

本多工業に向かう途中に、パチンコ屋がある。春風に翻るのぼりに「薔薇色の未来が待っている!!!」という陳腐な言葉が書かれている。

信号で停まった田中は、小さく

「薔薇色っていうのは気恥ずかしいから、俺は桜色の未来くらいでいいですね」

と笑った。

「お前は気楽でいいな」

呆れながらもそんな田中が羨ましくて、私は小さく笑った。

嫌だと思っても仕方がない。互いの最善を探るとしよう。それが俺の仕事だ。

「ところで、なんしか、って何ですか？」

「……戻ってから、吉田に聞け」



投稿時刻 : 2014.03.08 23:25

総文字数 : 377 字

獲得☆ 3.000

## なるはや連辞一層次

ひやとい

桜色といえば福山雅治の桜坂だが、この曲はけっこう前に「アリの穴音楽部」というのをやったとき、に、コードもまともにおさえられない私が練習したもののひとつだ。といっても簡単なコードばかりなので見ながら鳴らすだけならさほど難しくもないのだが、私はいくら練習してもコードの並びをすぐに忘れてしまうので、ソラだとずっと間違えっぱなしなのだ。そこをなんとかごまかして全ツツパするわけだが、さすがに駅前でやろうと言われた時は困った。新大久保のみなさんその節は本当にごめんなさい。今からおわびにソチのスキースロープスタイル（スノボはやったことありません）会場でマトリョーシカ飛び越えますんで許してください。つきましては旅費の一切など面倒みていただける方を募集します。あとバンドやりませんか！ 当方プロ志望です。パートはボーカルです。それ以外マジなやつ探してます！

以上です。

## 終わりに

---

第 15 回てきすとぼい杯、お楽しみいただきましたでしょうか。

今回は、お題を「桜色」「なるはや」「マトリョーシカ」とさせていただきましたが、どうも「なるはや」は、あまり一般的ではない語でしたようで、耳慣れている方と、初めて目にしたという方とで、お題の難易度に差が出てしまい、少々課題のある出題となってしまったようです。

一方で、この「なるはや」がお題として面白かったと言ってくださった方もいらっしゃいまして、改めて出題の難しさ、奥深さを感じる結果となりました。

作品全体を見ましては、やはり「マトリョーシカ」が存在感を放っていたように思いますが、いかがでしたでしょうか。

マトリョーシカ人形の持つ独特の構造を、宇宙、人間、出産、時間、社会構造、果ては文章構成そのものにまで組み入れ、観念的な複雑さと、不思議な読後感を持つ作品が多かったように思います。

その影響かどうか、今回 S F 要素を取り入れた作品が多い、というご意見もありました。S F とマトリョーシカ、遠いようで共通点を持った題材なのかもしれませんね。

――最後になりますが、今回も、非常に独創的で読み応えある作品をお寄せくださった作者の皆さま、また、投票・感想・チャット会にご参加くださった全ての皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯は、今後も毎月中旬頃、定期開催を予定しております。お時間ございましたら、またぜひ、お気軽にご参加くださいませ。



2014 年 4 月 5 日  
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、本日 2014 年 4 月 5 日 (土) 開催です！



作品集電子書籍をPubooにて頒布中。

# 言葉の茂る 樹が育つ。



てきすとぽいは、競作や共作を支援する  
テキスト創作サイトです。定期開催や、  
利用者主催の競作イベントが、日常的に  
開催されています。  
感想やアドバイス、採点などを通じて、  
作家同士が言葉を交わしあい、言葉の  
やりとりが豊かに茂り広がっていく。そんな  
サイトにあなたも参加して、一緒に創って  
いきませんか？  
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集  
〈第15回〉

<http://p.booklog.jp/book/84461>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84461>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84461>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ